

地域と協同の 研究センターNEWS

2023年9月25日発行
229号

2023年度「協同組合のアイデンティティ」公開セミナー

討論・私たちが協同するのはなぜか

2023年9月2日（土）名古屋市都市センターで公開セミナーが開催されました。向井忍氏（地域と協同の研究センター専務理事）から趣旨説明があり、3部構成ですすめられました。（文責：事務局）

開催趣旨：向井忍氏

2021年のICA（国際協同組合同盟）ソウル大会で、1995年に採択された「協同組合のアイデンティティに関する声明」の見直しを含む検討が始まりました。地域と協同の研究センターとしても、東海地域の経験を元に、これからの社会で「協同組合のアイデンティティ（＝協同組合らしさ）」として何が大切か考えたいと思います。本日は3部構成です。第1部は、地域の実践から協同組合への期待を語る、第2部は、生協の事業や活動（組合員・職員）から期待を語る、第3部は、協同組合らしさをどう見直すかという構成で、身近なところから順に確認しながらすすめていきます。「協同組合のアイデンティティ」は「定義」「価値」「原則」で示されていますが、協同組合の活動の実践を報告していただき、どのようなことで協同組合らしさが発揮されているのかを確かめていきます。

第一部 地域で暮らす住民からの、協同組合への期待

第1部で、3人の方にお話しいただきました。それぞれの活動をご紹介します。

みえ医療福祉生協 ガーデン大山田の紹介

「ガーデン大山田」がある桑名市・大山田の人口密度は1km²当たり6,814人。子どもたちも多く、戸建て住宅を中心した地域です。2016年、旧「大山田生協クリニック」施設を活用し「ガーデン大山田」がスタート、「地域まるごと健康づくり」の拠点となっています。たくさんのサロンやママカフェも開かれています。活動を紹介する「ガーデン大山田だより」も新聞折り込みしています。近くに桑名市社会福祉協議会が「桑名福祉ビレッジ」という多世代共生施設を建てましたが、ガーデン大山田も建設委員会に加わり、コープみえが生協商品を提供（員外利用）する「らいむショップ」というお店ができました。まちづくり協議会も立ち上がりつつあり、「ガーデン大山田」は地域で欠かせない存在になっています。

【2ページにつづく】

研究センター9月の活動

1日（金）第3回協同の未来塾	19日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」①
2日（土）東海交流フォーラム実行委員会 「協同組合のアイデンティティ」公開セミナー	21日（木）金城学院大学人間科学部「協同組合論」① 第4回協同の未来塾
3日（日）あいち子ども食堂ネットワーク役員幹事会	23日（土）消費者革新懇談会、三河地域懇談会「防災ずきんをつくる会」
4日（月）くらしと協同の研究所30周年式典	24日（日）東日本震災支援クラシックギターコンサート
5日（火）常任理事会	26日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」②
8日（金）第6回組合員理事ゼミナール	27日（水）研究センター・コープみえ会員懇談会 ウクライナ避難者支援情報共同会議
8～10日（金）～（日）日本協同組合学会秋大会	28日（木）金城学院大学人間科学部「協同組合論」②
11日（月）地域における子どもの学習支援共同研究会	29日（金）三河地域懇談会世話人会、岐阜地域懇談会世話人会
16日（土）第3回共同購入事業マイスターコース	30日（土）友愛協同セミナー

※ 各行事は新型コロナウイルス感染対策をとって実施しています。

目次	協同組合のアイデンティティ公開セミナー	1	誰もが同じように人権が保障される社会を	9
	討論・私たちが協同するのはなぜか		情報クリップ	10
	豊橋生協会館へ寄らまいかん	8	書籍紹介	12

【1ページからつづく】

平手マリ子氏（ガーデン大山田 みえ医療福祉生協）

【1ページからつづく】

「ガーデン大山田」の活動はたくさんあります。ここに来ればやりたいことができると集まって始めたことが、赤ちゃんから高齢者までの活動で、それぞれの活動は自分で責任を持ってやられています。また「ガーデン大山田」だけでなく、まちづくり協議会を立ち上げてもらって、まちづくりとして行って欲しいと呼びかけてきました。一つの学区で立ち上がり、その方々が「富士山公園で遊ぼう」という活動の中で、参加者向け健康体操をしています。「ガーデン大山田」がある地域も、最近まちづくり協議会が立ち上がりました。「ガーデン大山田」を使って活動したいと相談しています。子どもたちの活動を6ヶ月計画して、まず10月31日にハロウィンをやります。子どもや自分の世代の人たちのイメージ、想いでやろうということになっています。若い人が入るのは大事です。ワーカーズコープについてなんとなくわかるので、大事だということで、私たちも取り組んでいこうという話になっています。「ガーデン大山田」の活動をしている人たちは、私も含めて元気な人がやっています。結構80代の人でも元気です。80代の人を中心にやっているサークルもあり、自分が希望を持つことができます。

8月に3回、子ども支援の活動をやりました。紙飛行機を飛ばそうと、校長先生と連携し校庭を使うことにOKをもらいました。若い人たちに取り組んで欲しいとやっています。「ガーデン大山田」は一步踏み出したという感じです。

JA愛知東 やなマルシェの紹介

「やなマルシェ」のある、新城市・八名地区の人口密度は1km²当たり122人。浜名湖に近い、山に囲まれた人口4,809人の地域です。「やなマルシェ」は、2017年にJA愛知東のAコープ八名店が閉店した直後から始まった「朝市」と「フリーマーケット」です。今では、子育てのまるっこクラブ、認知症カフェ、ミニデイや高齢者のみなさんの集まる場になり、建物は「JAプラザ」として定着しています。JAもここで宅食サービスを始めています。「まるっこクラブ」は夏休みに一日借り切って、地域の子どもたちが集まりました。この地域には、JA移動店舗（J笑門）やセブンイレブンの移動販売もあります。

加藤久美子氏（やなマルシェ JA愛知東女性部やな）

「やなマルシェ」も今年で7年目になり、無償のボランティアで続けています。この夏休みは子どもたちに宿題はなく、学校に行くこともなく、プールもなければ自主学習もありません。家庭学習をして家庭で夏休みを過ごしてくださいということです。そうすると親は、宿題がなくて家庭学習っていったい何をやればいいのか？親が家庭学習って何かということに勉強する場もありません。「やなマルシェ」の中に「まるっこクラブ」という若いお母さんたちのグループがあり、そのお母さんたちは配食サービスの弁当もつくりたくないといけませんので、その間子どもたちはどうするのか。この「やなマルシェ」で、子どもたちが集まって遊んでいけばいい。自分たちができる範囲で、学童保育みたいなことをやったらどうかということで始めました。お母さんたちが当番で子どもたちを預かり、9時から3時まで行いました。しかし「やなマルシェ」の狭い空間に子どもたちを一日入れておくことは、並大抵のことではなく苦労しました。でもミニデイの日は、健康体操をやったりして3世代で集まるのが今の家庭ではなく、「こんな小さな子たちを久しぶりに見た」と非常に喜ばれ、子どもたちも喜び、いい交流ができました。若いお母さんたちの中でもいろいろな気づきが出てきました。

若いお母さんたちは今までお母さん同士がつながる場がなかったので、個人で解決しよう、その家庭で解決しようと思っていました。しかし、JAプラザに集まり、夏休みをどうするか、今後どうするか、話すきっかけができました。その居場所があって、そこで話すことができたことで、「あなたも同じ悩みを持っていた」と悩みの共有ができました。そして地域的になんとかできないかと話すようになり、学童もどきのようなことができました。

「真ん中に個人があります。個人でできないことは家庭でやりましょう。家庭でできないことは地域でやりましょう。地域でできないことは行政にお願いしましょう。」ということです。若いお母さんたちは今までお母さん同士がつながる場がなかったので、個人で解決しよう、その家庭で解決しようと思っていました。しかし、JAプラザに集まり、夏休みをどうするか、今後どうするか、話すきっかけがで

きました。

飛騨市 地域複合サロンの紹介

飛騨市の人口密度は、宮川地域3人/km²、河合地域4人/km²、神岡地域23人/km²、となっています。

2017年、飛騨市地域包括ケア課からコープぎふ飛騨支所に、買い物支援の相談がありました。おたがいさまひだの協力で、宮川地域と河合地域に買い物もできる地域複合サロンが始まりました。河合地域では若いお母さんたちが「つながる喫茶」を立ち上げ、サロンを応援しています。「ばあちゃん食堂」という子ども食堂が始まり、パン屋さんからパンを買ってきて売ったり、子ども向け駄菓子も並びます。飛騨のみなさんが「やなマルシェ」を見学した後、河合のAコープ店舗跡を活用したサロンが広がっています。神岡地域の山之村地域の買い物について、コープぎふと飛騨市と濃飛バスが協定を結び、公共バスで商品を運んで、届いた商品をサポーターさんが注文した組合員に届ける仕組みがこの4月から本格的に始まっています。

松原滋氏（地域複合サロン 生活協同組合コープぎふ飛騨支所）

最近の状況についてお話しします。この8月はとにかく忙しかったです。「つながる喫茶」は、河合町で毎週行われています。そのメンバーが若手のメンバーです。河合町の他にある三つのサロンを支えています。昨年11月に「やなマルシェ」を19人で見学に行きました。半分くらいはJAの関係者で、3分の1くらいが社協の方とか市の職員でした。この研修をして12月に大きな動きがありました。「やなマルシェ」を見てきた方が12月に働きかけて、JAの空き店舗活用につながり今に至っています。

2023年になって、いろいろなところで動きがあり、「つながる喫茶」は毎週開催して半年になります。「ばあちゃん食堂」は毎月開催ができるようになりました。若手のメンバーは小学生のお母さんたちで、サロンには、小学校が全校生徒で28人ですがその内20人くらいが参加することもあります。校長先生もずっと来られて、地域のことを話し合う場になり、地域で定例化された居場所になっています。市議員の方も顔を出されるようになりました。「スナックまさこ」は先日60人の参加があり、半分以上は男性でした。昼間は参加できないという方も夜なら参加でき、試験的に午後8時までやりました。

第二部 組合員のくらし・職員の仕事と協同組合らしさ

3 生協の取り組み紹介（向井忍氏）

第二部では、東海の3つの生協（コープぎふ・コープあいち・コープみえ）で行われていることに照らして、生協への期待を話しあいます。研究センターでは、昨年4回に渡り「組合員意識と利用分析に基づく公開研究会」を開催し、各生協からの報告で、生協や地域で起きていることを取り上げてきました。公開研究会での3生協の報告について紹介します。

生活協同組合コープみえの報告では、宅配事業の利用人数と金額が予算に届いていないことについて、購買している組合員さんに生協の強みである価値を前面に出さなければいけないと、生協の価値を発信して事業に取り組んでいることが報告されました。また、2030年に向けてコープみえが目指していく「つながりあう安心 笑顔が輝く くらし」を実現する指針は組合員の幸福度ではないか、組合員が幸福になることを目指してコープみえは努力しよう、組合員の幸福度を計ろうとアンケート調査をされています。その中から、キーワードとして「時間」「お金」「健康」「つながり」「自由と権利」が出されています。これは組合員のみなさんが大事にしている価値ということかもしれません。そのためには、組合員一人ひとりが自分の目標に向き合える仲間とつながること、そのための生協の役割として、自主的な組織が必要と報告されました。

生活協同組合コープあいちの報告では、宅配事業の組合員の年齢構成の変化を紹介されました。2011年と2023年の12年間で比較し、2011年には20歳代が80歳代よりも多かったが、今は、80歳代が上回っています。70歳代は、12年前は少なかったが、今は30代、40代、50代とほぼ同等の人数になっていて、組合員の高齢化がすすんでいます。一方で、高齢組合員で認知症と思われる方の人数も報告さ

れました。配達現場で、こういう方との接点があり、コープあいちでは事業を通して願いを実現するために、情報をデータベースで共有しています。生協事業の相互連携ができるよう、組合員のデータベースを活用し、購買も福祉もいろいろな場に対応できるようにしていると報告されました。さらに組合員の一生を通して考えると、事業と活動以外にも行政や他団体と連携しないといけない、そういう地域との繋がりが必要であることが示されました。

生活協同組合コープぎふの報告では、岐阜市（県庁所在地・人口が多い）と飛騨市（中山間地域）を比較されました。都市部と中山間地の違いを配送トラックの荷物で比べると、岐阜市は冷凍品・冷蔵品の入るシッパーが多く、飛騨市は日用雑貨が多くなっています。コープぎふの高齢者対応では、デジタル対応でできること、商品対応でできること、人でないとできないこと、行政や地域と連携しないとできないことがあると示されました。そうしたことについて聞き取り調査もすすめているということです。

また、人口減少する地域では「誰かが何かをやってくれる」「助けて欲しい」ということではなく、「今できる人が協力し合って、生協も一緒に応援してくれませんか」という関係になっているということです。中山間地では地域と一緒にまず自分たちがやる、そこで生協も一緒に応援してくれないかという関係だということです。飛騨市の貨客混載の実証実験も紹介され、地域住民が主体的に取り組み、関わる人たちが関われることで、関わる時間ですすめていること、そういう人たちや活動をつなぐハブとして、生協や行政や諸団体の役割を示されました。コープぎふは「誰ひとりとり残さない」ことを掲げており、そのためにも組合員の自主的参加と地域での活動を大事にしています。厳しい情勢の中で生協を頼りにする方を「誰ひとりとり残さない」ためにも「コープぎふの事業基盤を強固にして、将来に渡っても事業を継続できる状態をつくるのが大切」ということです。

3生協はいずれも地域やくらしが変化する中、組合員の願いに応えるには、生協（組合員）が自主的に関わることを前提にしながら、地域のたくさんの力が関わらなくてはならないことを示しています。

妹尾成幸氏（生活協同組合コープみえ 組織活動推進部）

公開研究会でのコープみえの報告と、三重県生協連（コープみえ、大学生協、医療福祉生協等）で、それぞれの生協の役職員が集まり「協同組合のアイデンティティ（定義、価値、原則）」について、内容を踏まえながら、どういう方向で検討をするかワークショップを行った内容について報告します。

また、コープみえでは、理念ビジョンの到達点を2030年に向けて組合員にとってどう評価していくか、そこを組合員さんにアンケートを実施しました。その一部を紹介します。

たとえば、アンケート項目で下記のようなことを組合員のみなさんに直接お聞きしました。

- ① 助け合いの輪がひろがって地域が明るくなったと感じますか？
- ② ジェンダーや障がいやを気にせず、あらゆる人が活躍できる社会になっていると思いますか？
- ③ 県内の生活協同組合が連携して、SDGs など社会をよくする取り組みが広がっていると感じますか？

①の「助け合いの輪がひろがっているか」という問いには、7割近くの方が「そう感じない」と応えられています。②の「あらゆる人が活躍しそうか」という問いには、7割を超えて「そう感じない」と応えられています。③の「生協が連携して社会をよくする取り組み」の認知度は半々くらいでした。こうした回答を受け止めて、私たちは何をどうすすめていくかということです。

次に「協同組合のアイデンティティ」を考えるワークショップについて紹介します。今、地球を取り巻く環境や平和は、非常事態に近い状況で、その状況を組合員のみなさんにも伝えて一緒に考えることが大事と出されています。この論議をした中で出された意見は、協同組合はオピニオンリーダーだと改めて確信したという声も出されました。出された意見について紹介します。

協同組合のアイデンティティ「定義・価値・原則」についての意見です。この「定義・価値・原則」で、何を大事にしていけばいいのか話し合いました。この書かれている内容は、一つひとつ原点に近い大事な中身です。特に一人一票の原則であるとか、組合員による民主的な管理であるとか、自主的な組織であるとか、これらは何事にも代えがたい特質です。また教育、訓練、広報は私たちが大切にしてい

くものです。そして、協同組合間協同は、文面だけですすめられるものではなく、ここをどうやってすすめていくといいか話し合いました。

こうなったらいいなということを役員で出し合いました。紹介します。「誰もが生協を知っていて、多くの人が組合員になっている状態を目指したい」ということがありました。これはなぜなのか、一つにはいろいろな施策に影響を与えられるということです。そして今組織として、これだけ単身の人が多くなっている状況の中で、単身でも集まる、参加できる、コミュニティに加わっていける協同組織であって欲しいという意見も出されています。

そして、生協は持続可能な社会づくりの先端に立っていき、協同組合間協同、さらには行政・事業体を含めた協同の中で、地域の課題を連携の中で解決していくということも出されました。もう少し細かく目を向けていくと、組合員の皆が何かを提供し、何かを得ていく。主体である組合員が自分自身でできることをし、相手にもできることをすすめていく。そして、価値観、幸せを求めていくということの話がありました。

評価軸のところ少し目を移すと、協同組合として、消費者の価値観を変える。新たな価値観で暮らしを創り直していくということも必要だという意見も出されています。地域と協同の研究センターにある「研究フォーラム食と農」でも、消費者と生産者の関わりを考えていく中で、消費者が変わらないと生産者は変わらないのではないかと議論もされています。先ほどの幸福に関わっては、消費者の価値観ということも話し合いがすすめられました。

今日のテーマは地に足をつけた地元の話ですが、大きな広い意味では国を超えた連帯組織として機能していくことです。それぞれ協同は身近な小さな単位から始まります。生協は基本的に県単位で活動しますが、ボーダーレスな取り組みになって欲しいこともあります。今ですと平和であるとか、環境であるとか、地域を超えた世界的な課題が危機的な状況にあります。そこに対してどうつながっていくのか、意見が出されています。

そうした中でどう変えていきたいかということもあります。「協同組合のアイデンティティ」定義・価値・原則について書き換えたい、加えたいという意見も出されています。少し紹介します。

まずは平和を位置付けたいということです。この間、皆でウクライナへのロシアの侵略、世界を脅かす平和の問題について話し合ってきました。例えば、価値の定義で、「倫理的価値を信条とする」という条文があります。その「倫理的価値を信条とする」の後に「人々の平和に寄与する」という文言をいれたらどうかという意見がありました。

原則の第2原則で、「選出された代表として活動する男女」とありますが、男女という表現についてジェンダーから考えると表現を変えるべきではないか。第4原則では「自治と自立」で、政治的ニーズへの関与、施策に対して関与していくということ。第5原則の「教育、訓練および広報」で最後に「協同組合運動の特質と利点について知らせる」とありますが、それにとどまらず、知らせるだけじゃなくて共有しようという言葉も補足で入れてはどうでしょうか。

このように「協同組合のアイデンティティ」の文書の見直しについて話し合ってきました。

伊藤陽子氏（生活協同組合コープぎふ 理事）

今回「組合員意識と利用分析に基づく公開研究会」に参加してということで、私が思ったことと、今の組合員活動についても触れさせていただき、お話をさせていただきます。

今回の公開研究会で、3生協の事例・情報が報告され、他生協のことを知る機会になりました。将来どんな生協になりたいかを考えるきっかけになったのではないかと思います。

第1回「くらしの変化の特徴」からは、報告1：報告組合員アンケートの経年変化から（コープみえ）では、みえのアンケートから、現在の利用実態を知ることから重点が見えたことや、報告2：コープ宅配利用者の高齢化に伴う課題を考える（コープあいち）ではあいちの数値から見える高齢者の課題が、報告3：都市部と中山間地の利用状況から、くらしの変化と生協の役割を考える（コープぎふ）では現代の組合員のくらしを読み解くことができたのではないかと思います。

第2回「利用（職員の仕事）をとおして」では報告1：中山間地域と都市部の地域の皆さんとの関わりについて（コープぎふ）では、職員の仕事、山間部の宅配事業について貨客混載の実証実験とか、子

育て支援の連携協定等、住んでいる人や諸団体のつながりで生活が成り立つ地域と、生協にお願いしますと言われる地域があることから、人とのつながりは何か、違いを知るきっかけになりました。報告2：事業（利用）と職員の仕事～福祉事業との連携事例から今後の事業間連携について～（コープあいち）では、注文商品をお届けするのではなく、その人の生活の様子について広がった見方ができることで、事業連携のよさが職員の中に広がったのではないかと思います。また発表時の今後の生協に求められるものとして「人の一生の生協の関わり」について、ゆりかごから墓場までと言われる事業が生協にはあることがよくわかりました。報告3：夕食宅配の見守りサービスについて（コープみえ）では、生活を見守ることは、安心して生活できる社会につながることを生協として役割を押しやる機会として取り組んできています。

第3回「組合員の活動を通して～社会の多様化に、生協の組合員組織・社会活動はどのようにかわるか～」では、現在の組合員の生活スタイルの変化が、3生協とも組合員活動の大きな変革点になっていると感じました。コープぎふでも今年度より、くら活パートナー制度という新しい仕組みが始まりました。組合員のやってみようという声から始まる、できる時に、できる人が、できることを一緒に活動がすすめられるようにしています。企画を考えること、企画当日の運営だけ携わること、会場参加、オンラインを使った自宅でもできること、参加すること、すべてに関わることが無理でも、少しでも参加できるような組合員活動を今後は考えていくことが必要ではないかと思います。

第4回「ビジョン：2030年への生協の役割」は、他のテーマでもあったように、事業連携、地域行政諸団体との関わりをすることで、組合員活動をその時必要とされていることを取り上げることで、生協をより身近なところで感じていただけたと思います。この夏休み、コープぎふの取り組みの報告からは、3年ぶりにリアルであったと感じ、組合員活動、地域諸団体と一緒に活動に多数参加されていました。企画する側はこんなことを知って欲しい、こんなことができるかとも思い、参加されるみなさんはみんなと一緒に何かしたいという思いから、以前のような活動がすすめられていると思います。そういった組合員活動の積み重ねをすることで、生協とのつながりが、生活での安心感となり、生協らしさとなるのではないかと思います。また事業として東海コープで3生協が一緒に行っていますが、各生協の中でも地域によってくらしや生協の利用の仕方が様々です。組合員のくらしに対して、配達現場個々に対応してすすめられることと、生協組織全体で考え対応していくこと、そして性別、年齢、世代、住んでいる地域に関係なく問題解決し、生協だけではできないこともあり、行政・地域・諸団体と連携することで解決できることを、公開研究会の場で共有できたと思います。組合員活動の組織、活動のあり方も3生協違いがありますが、お互いの生協の中で共有できることもあると思います。今後は同じような事例を共有しながら、一緒にすすめることができる機会をつくることができればと思います。最後に組合員、生協職員、諸団体、地域の方々と一緒に話し合える場があることで、2030年に向けて、もっと先の将来に向けて、よりよいくらしにつながっていくと思いました。

近藤充代氏（日本福祉大学 非常勤講師）

「公開研究会に参加して、お二方のお話を聞いて、生協の役割や今後への期待についてコメントを」という私に出されたお題に沿ってお話ししたいと思います。

まず1点め。今回の「組合員意識・利用分析に基づく公開研究会」では、生協の課題がいろいろある中で、高齢組合員へのサポートをどうしていくかという点に焦点の1つを当てて、各生協の取り組みが詳細に報告されました。それをうかがい、まず職員のみなさんが頑張っておられる、組合員に寄り添い、その意思を尊重しながら、ひと手間もふた手間もかかるような対応をされていることがわかりました。コープぎふの職員の平子さんは、高齢の組合員への配達時には届けた商品と翌週の注文表とを照合して注文の重複等を確認したり、事前に商品案内を熟読して調理方法にまで踏み込んで（高齢の組合員が困らないように）注文品の確認をしたりしているとのことでした。

コープみえでは、夕食宅配で見守りサービスをされているとのことでした。配達時にお弁当が未開封の場合は宅配担当者が本部に連絡し、本部から組合員本人に確認をする。本人に連絡が取れない場合は緊急連絡先に連絡する等の対応をシステムとして確立しています。組合員が家の中などで倒れており救急搬送を依頼したなどの緊急対応事例は年に数件あるとのことでした。

公開研究会で向井清史先生が指摘されたことですが、生協と大手のスーパーとどこが違うのかといえ、生協は組合員の生活全体に関心を寄せている、そこが大手スーパーとの違いだということです。妹尾さんのお話でも紹介されたコープみえの「幸福度アンケート」もそういう例かと思います。生協はただ単に商品を売る、あるいは個配で届けるだけではない、どうしたら組合員が安心して生協を利用できるか、安心して暮らせるかに常に関心を寄せている、そういうところが協同組合らしさだと思います。

今後ますます高齢者が増えていくなかで、そうした生協の高齢者対応で大事なことは、組織のなかに集約されている情報を共有すること、そして十分にコミュニケーションをとるということです。また、向井清史先生が指摘されていたように、生協が何もかもやろうとしないということも重要だと思います。職員ができることとできないこと、組合員に協力してもらえらること、場合によっては有償でもいいから協力してもらえないか。あるいは行政と連携する、他の団体・組織と連携することはできないか。生協の中で共有している情報をもとに十分に話し合っ、問題の解決策を考えていくということが今後の課題かと思います。直面する課題を、職員だけでなく、組合員と協力して解決していくことができるというのも生協らしさ、協同組合らしさだと思います。

そうした取り組みをさらに広げていくために参考になると思ったのは、コープあいちの名東の宅配センターと福祉事業部が連携して高齢者対応をしているという事例です。情報を共有するとともに、宅配のトラックに福祉事業部の職員が同乗する、福祉現場に地域担当が見学に行く、協同のケーススタディをする、そうしたことを通して職員の意識が変わったというお話が印象的でした。組合員の暮らし全体に関心を寄せることで気づきがある、組合員の困り事がわかる、対応力がアップするということが起き、さらに他の部門の事業内容がわかると、困り事への対応力がさらにアップする、対応の幅が広がるということでした。このようなことが他の宅配センター、他の生協でも広がることが望まれます。

もう一点は、まずは集まる場が大事だということです。各生協が組合員活動の活性化に取り組み、工夫されていることが紹介されていました。昔と比べると活動が低調になりがちだと報告がありましたが、見方を変えてみると、生協は結構頑張っているのではないかと思います。いまの世の中、人々が集まって活動している場というのはなかなかないことです。しかも生協は安心して集まれる場を提供できるということが根底にあります。当日の意見交換の中でも、目的を決めなくても集まって話しているうちに、実は困りごとや悩み、願いなどが共通していることを知り、自然にみんなでやりたいことが出てくるという経験が紹介されていました。いろいろな仕組み作りも大切ですが、生協としては、まずは集まる場をつくる、提供していくということが重要ではないかと思います。

第三部 これからの社会と「協同組合らしさ」

趣旨説明（向井忍氏）

第三部は、地域からの期待、生協組合員・職員から期待を受けて、これからの社会における協同組合らしさはどのようなものかについて話をすすめます。研究センターでは6月3日の日本協同組合学会（名古屋開催）で「東海の実践から、協同組合らしさを自由に語る」セッションを開催しました。そこでも今日報告いただいた平手さん、加藤さん、松原さんを含む5名より実践報告していただきました。また「地域社会やコミュニティ（自治会）の現状」、「文化の多様性が進行している状況」の中、「協同組合という組織がなぜ有効なのか」について報告をもとに話し合いました。これらをうけて、協同組合らしさをどう考えたらいいか、お二人からお話いただきます。

研究センター常任理事の小木曾洋司先生（中京大学現代社会学部教授）は、協同組合の第7原則「地域コミュニティへの関与」と、第4原則「自治と自立」が大切になっていることを指摘しました。

前田健喜さん（日本協同組合連携機構）は、日本協同組合連携機構として「協同組合のアイデンティティ」を見直すワークショップを呼びかけていること、そこで出されている意見について紹介されました。（事務局）

三河地域懇談会主催

報告：伊藤小友美（事務局）

豊橋生協会館へ 寄らまいかん



4年振り、4回目の「豊橋生協会館へ寄らまいかん」を7月1日（土）開催しました。参加者はオンラインも含めて100名余でした。主な内容は、メイントーク、ランチ・ティータイム、キッズクッキング、交流広場です。オープニングは三河の方言ですすめられる体操で大いに盛り上がりました。三河地域懇談会で研究に取り組んできた煮味噌の家康めしランチも大好評、地元のメーカーさん7社の参加もあり交流がすすみました。「戦争を知らない子供たち」「青い空は」をみんなで歌い幕を閉じました。

メイントークのテーマは「平和・食・健康」、市田真澄さん（デイリーファーム社長）・野田清衛さん（のだみそ社長）・中嶋 芳夫さん（市民農園/農業）の三名が今の思いを熱く語られました。進行は八木 憲一郎さん（三河地域懇談会世話人）です。午後の交流の場では、みかわ市民生協創立のころのお話と東京空襲のお話を高橋正さん（みかわ市民生協元理事長）に伺いました。当日を振り返り、世話人会では「楽しかった」という言葉が飛び交いました。笑顔あふれる一日となりました。

【市田真澄さんのお話】 私はたまごをつくっていて、もう40年になります。岡崎や安城で試食交流をよく行いました。鶏の育て方、餌の与え方、安全なたまごづくりの話を交流会でしていましたが、そのころの風景がありあり浮かびます。「市田さん、がんばりなさいよ。私たちが支えるから。」と組合員の皆さんが言ってくれました。胸が熱くなって、非常に心強く思いました。それから、餌は全部ノンGMOで68歳までやってきました。昨今、たまごの値上がりが話題になっています。その理由は、鳥インフルエンザと餌の高騰です。ロシアのウクライナ侵攻がその原因のひとつです。中国が輸入をするようになったこともそうです。穀物をつくるには肥料が必要で、日本は輸入をしています。肥料がないと穀物も育たない。100%ノンGMOの餌を食べさせたデイリーファームの鶏の鶏糞はサラサラで匂いもありません。地域の農家と連携して、抗生物質、抗菌剤を使わずに飼料米をつくってもらって、それを鶏に食べさせています。輸入せず自分たちでつくって自立しようとしています。日々の暮らしを大切にすることが、平和を願ういちばん大事なことだと思っています。

【野田清衛さんのお話】 今から50年前、めいきん生協の組合員さんたちがバスで見学に来られた時の写真があります。祖父が写っています。生協との取引について社内会議も行き、初代（私の祖父）が、「彼らはまちがっていない、正しい行いをしている。」と言って、押し切ったそうです。私は3代目として初代の言葉を継承しています。この4年間、見学に来ていただくことが難しかったのですが、子ども達（小学生から大学生まで）の見学、食育の授業は続けていました。発酵の国に生まれた人間として、日々食べているもの、味噌、漬物、ビールなど発酵のことを理解するのは大事で、キーワードは「生き物」です。大切なことのもうひとつに「平和」があります。私の蔵は岡崎航空隊の跡地にあります。格納庫、兵舎が生きています。豊川の海軍工廠も若い語り部が伝えています。我々の会社でも、自分たちで調べて、伝えてきました。1万2千人の子どもたちが予科練にいました。第3航空隊です。ある日、88歳の男性がカメラをぶら下げて、帽子をかぶってやって来ました。ここで終戦を迎えたそうです。玉音放送をここで聞いたそうです。運よく生き残ったとのことでした。後にいただいた年賀状は私の宝物になりました。蔵の写真に自筆で「私は生き残って何をしたのか」という言葉が添えられていました。そんな思いをつなげるのは生きていながらやれることです。変わっちゃいけないことがあるんじゃないかと、みなさんとともに考えたい。

【中嶋芳夫さんのお話】 4年前、会社経営を辞めた時は、病気の入口にいました。これを変えようと、市民農園を始めました。通勤に片道120km。電磁波と超ストレスの毎日でしたが、太陽と自然の中で、身体を使って野菜を育て、教えてもらって収穫できて、その満足感は計り知れません。恵実生産者グループの安藤さんの畑は半世紀以上有機栽培を続けています。大事なはその地域にあった種。資材はあいているときに使わせてもらい、微生物も上手に使います。体重は7キロ減り、BMIは25まで減りました。腹囲も中性脂肪も減り、コレステロールも善玉は増え、悪玉は減りました。このままずっといくと死ぬ手前からUターンし始めました。一緒に農園をがんばる仲間を募集しています。

(いとう こゆみ)

誰もが同じように人権が保障される社会を

神田すみれ (地域と協同の研究センター研究員)

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は、9月13日現在2,503人(在留者数2,092人)、東海地域では、愛知県は117人、岐阜県は14人、三重県は1人です。9月15日、障害のある人たちの共同作業所が加盟する「きょうされん」の研修で、平和をテーマにお話する機会をいただきました。まず、日本ウクライナ文化協会の川口リュドミラさんから、6月にウクライナ一時帰国されたときの様子を、写真を交えて報告いただきました。病院に入院して、手足をなくしてしまった兵士たちに、日本からの寄付金でお見舞いのお菓子を届けた時の様子、日本から持っていったインスタントスープ、虫除けグッズを現地の人たちに渡す様子を、写真を交えてお話いただきました。街に鳴り響くサイレンの様子を記録した動画も紹介されました。真っ暗な夜にサイレンが鳴り響き、リュドミラさんは一人どこに避難すればいいかもわからず、なすすべがなかったそうです。また昼間の街でサイレンが鳴り響いている動画では、人々は驚くことも、逃げることもなく、通常通りに生活している様子が映し出され、サイレンが鳴ることが日常化していることがわかりました。爆撃で破壊されてしまった建物や、破壊された街に、その後放置されたまま、錆びついてしまった車が積み上げられている写真が紹介されました。戦争で破壊されてしまった街は元には戻らないこと、手足を奪われてしまった人たちも、心にトラウマを抱えた人たちも、元のように戻ることにはできない、とお話されました。ウクライナの田舎の美しい田園風景の写真も紹介いただき、そこには木になるたくさんの果実、蜂蜜がたくさんとれるという蜂の巣、野原をかけるうさぎの姿がありました。本来のウクライナの風景はこのように緑豊かで美しい自然があり、ウクライナの人たちは農業を中心に穏やかな生活を送っていたとのこと。戦争が始まるかもしれないというニュースを聞いたとき、リュドミラさんは「まさか本当に戦争が始まるなんて」と思ったそうです。「けれども実際に戦争は始まってしまいました。戦争によって奪われてしまったものは元には戻ることにはできません。だから、皆さん、今ある平和を大切にしてください」とお話されました。

私からは、難民について話をしました。現在、紛争、暴力、迫害、人権侵害により故郷を追われた人の数は過去最高となり、スーダン、アフガニスタン、ウクライナなど各地域で発生している危機が加わって、その数は増え続けています。強制移住を強いられた人たちは1億人を超え、これは世界の人口の1%を超える数にあたります。日本にも多くの難民が避難のため来日しています。日本は1981年に難民条約を批准しており、難民を保護する義務があります。ウクライナ避難民受け入れでつくられた体制や民間の支援を、多くの難民の人たちのためのものにする動きが求められています。

これまで日本の難民支援は非常に限定的で、難民の人たちの人権は保証されているとは言い難い状況でした。難民条約に規定されている難民の権利や義務の中でも特に保障されているものとして①難民を彼らの生命や自由が脅威にさらされるおそれのある国へ強制的に追放し、帰還させてはいけない(難民条約第33条、「ノン・ルフールマン原則」)②庇護申請国へ不法入国した不法にいることを理由として、難民を罰してはいけない(難民条約第31条)という決まりがあります。日本政府は、2020年秋に日本に避難した日本大使館職員とその家族に繰り返し帰国を勧奨していたことが問題になっています。私も複数のアフガニスタンの方たちから、1人ずつ個別に呼び出され「日本では生活ができない、早くアフガニスタンに帰るよう」と外務省職員から何度も帰国を促されたと聞いています。日本政府のために働いていたことが理由で、タリバン政権に命を狙われ、出国前は毎日寝る場所を変えて逃げていた人たちです。「帰国勧奨」の疑惑は9月14日に国会内で開かれたアフガン難民問題の集会でも野党が追及しましたが、外務省は「帰国は強制はしていない」と責任を否定しています。(しかし、実際3分の1の人たちがその後アフガニスタンへ帰国をしています。)ウクライナ人へ提供されている公営住宅の無償提供や就職支援、日本語学習支援が、アフガニスタンを始め、他の難民の人たちへも提供されるよう、全てを置いて命からがら逃げてきた人たちが、ゼロから新しい生活を始めるにあたり、基本的な人権が保障されるような社会に少しでも近づくことを願っています。ウクライナの人、アフガニスタンの人、ミャンマーの人、シリアの人、皆、同じ難民です。研究センターでは、2021年から、名古屋難民支援室、アジア・ボランティア・ネットワーク東海と共に難民食料支援と難民について「学び語り合う会」を定期的に行っています。次回の「学び語り合う会」は11月4日に開催します。どなたでもご参加いただけます。

(かんだ すみれ)

情報クリップ



co-opnavi 2023.9 No.856
自分らしい、心豊かなくらしを支える生協の福祉事業
 日本生活協同組合連合会 2023年9月 A4判 32頁 367円(消費税込)

- <私たちの「この一枚」>
 平和のための戦争展・喜多方
 コープあいづ 組合員活動部 戦争展実行委員会 大竹泰司
- 特集
 自分らしい、心豊かなくらしを支える生協の福祉事業
 <今日も笑顔のコープさん 生協の仲間のお仕事拝見>
 大阪よどがわ市民生協
- <想いをかたちに コープ商品>
 CO・OPフィッシュソーセージ
- <生協大好きママコブ山さんの 教えて! CO・OP商品>
 CO・OP蟹足風カニカマ
- <CO・OPの役立ち♪家庭用品>
 コープメイク ルラン
- <組合員に支持される店づくり・売場づくり>
 ララコープ
- <日本全国 宅配現場におじゃまします!>
 コープさっぼろ
- <明日のくらしささえあう CO・OPコープ共済>
 コープおきなわ
- <腰痛予防のための筋肉快適体操>
 監修: 順天堂大学大学院 先任准教授 谷本道哉さん
- <この人に聴きたい>
 イラストレーター 熊野友紀子さん
- <ほっとnavi>
 パルシステム山梨 / 日本生協連

生活協同組合研究 2023.9 VOL.572
誰もが自由に、安心して外出できる社会を創る
 公益財団法人 生協総合研究所 2023年9月 B5判 72頁 定価550円(消費税込)

- 巻頭言
 産地交流の大切さを想う 大信政一
- 特集 **誰もが自由に、安心して外出できる社会を創る**
 障害の「社会モデル」から「外出の自由」を考える 石川 准
- 高齢期における外出と心身の健康
 一閉じこもり高齢者に対する調査結果から 山崎幸子
 バリアフリー社会の実現を目指して
 一交通アクセス運動と東京オリパラを契機とした
 さらなるバリアフリーの推進 佐藤聡
- 子どもが安心して遊べる道路は大人にも楽しい交流の場
 一日本へのポネルフ導入を考える 葉袋奈美子
- 外出を後押しし、地域住民の交流を促進する
 はるな生協の「えんがお」佐藤紀代子(聞き手・山崎由希子)
- コラム 多様な世代が外出しやすくなる
 社会環境の構築について 大森宣暁
- 国際協同組合運動史 (第18回)
 国際協同組合同盟(ICA)
 1930年第13回 ウィーン大会① 鈴木 岳
- 本誌特集を読んで(2023・7) 岡田卓巳・根本篤司
- 新刊紹介 斉藤弥生・V.ペストフ(編)
 『コ・プロダクションの理論と
 実践参加型福祉・医療の可能性』 藤田親継
- アジア生協協力基金2024年度・助成金一般公募のご案内
- 公開研究会 「健康づくりへのナッジの活用」 9/21
- 公開研究会 「今改めて共済のアイデンティティを考える」 10/16
- 第32回全国研究集会
 「世界的な食料危機の中で、持続可能で健康的な食のあり方
 と生協の役割を考える」 10/28

文化連情報 2023.9 No.546
役職員一丸となり、厚生連医療・農協福祉が担う安心の地域づくりへ
 日本文化厚生農業協同組合連合会 2023年9月 B5判 80頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

- 会長再任ご挨拶
 役職員一丸となり、厚生連医療・農協福祉が担う
 安心の地域づくりへ 八木岡努
- 理事長再任ご挨拶
 共同購入・情報教育・地域づくりの会員貢献に全力で
 取り組みます 東 公敏
- タブロイド版『会員貢献と自己改革』第9号を発行
 日本文化厚生農業協同組合連合会役員紹介
 会長に八木岡氏(茨城県厚生連会長)を再任
 「協同組合のアイデンティティ」特別アピールを採択
 日本文化厚生連第75回通常総会を開催

特別アピール

「協同組合のアイデンティティ」(定義・価値・原則)を再確認し合い、厚生連医療・農協福祉が担う安心の地域づくりを実践しよう

農協組合長インタビュー (90)

米麦の二毛作を活かした安定生産を目指して 渡邊文雄
院長インタビュー (344)

年間一万人の救急に対応医療レベル上げ

鈴鹿の名を全国に 北村哲也

第 72 回日本農村医学会学術総会の開催にあたって

神谷 彰

「第 101 回国際協同組合デー記念中央集会」

が開催されました 栗山晴樹

協同精神のリレー (6)

中国供銷合作社との交流 伊藤澄一

二木教授の医療時評 (213)

『令和 5 年版厚生労働白書』をどう読んだか? 二木 立
アフガニスタンから見た世界と日本 (最終回)

アフガニスタン 戦禍からの再生・希望への架け橋
レシャード カレッド

ドイツの対 COVID-19 戦略 (最終回)

ドイツへの高い評価の理由 吉田恵子

アメリカの医療政策動向 (34)

メディケア薬価交渉制度をめぐる最近の動向 高山一夫
変わる日本のまちづくり (39)

身近なつながりにこだわる生き方としての地域食堂とく
くるの実践(北海札幌市厚別区)

杉岡直人・ 畠山明子

国民が安全安心に暮らせる社会の構築 (17)

農業の価値の多様性を活かす地方再生「社会的農業」

友岡有希

多様な福祉レジームと海外人材 (64)

家事労働者は住み込みと通いのどちらがいいのか

安里和晃

全国統一献立

三重県の郷土料理 盆汁(ぼんじる) 石田友子

デンマーク & 世界の地域居住 (170)

「あおいけあ」の『壁を壊すケア』(神奈川県藤沢市②)
松岡洋子

熱帯の自然誌 (90) イノシシ狩り 安間繁樹

◆第 9 回厚生連病院臨床研究研修会のお知らせ

▼線路は続く (178)

日田彦山線 夜明に向かって走れ/ 西出健史

社会運動 2023.7 No. 451

長生きしたら、どうしよう?—崩壊する介護保険制度をたてなおす

一般社団法人 市民セクター政策機構 2023 年 7 月 A5 判 128 頁 本体価格 1,100 円

FOR READERS 「介護の社会化」を阻む本当の原因
季刊『社会運動』編集長 白井和宏

PART.1 介護保険の過去、現在、そして未来

介護保険は、サービス抑制と負担増をめぐる攻防に
市民情報オフィス・ハスカップ主宰 小林雅子

再び家族の責任にしないために個人を支える社会づくりを
お茶の水女子大学名誉教授 藤崎宏子

外国人労働者の受け入れ方を知り、働き方を理解する
名古屋学芸大学 看護学部客員教授・名誉教授 石田路子

PART.2 生活クラブからスタートした介護保険の現場から

社会福祉法人 いきいき福祉会 神奈川

特定非営利活動法人 アビリティクラブたすけあい

(略称 NPO 法人 ACT) 東京

社会福祉法人生活クラブ<風の村> 千葉

社会福祉法人悠遊 東京

PART.3 介護をラディカルに考える

介護保険制度は新自由主義的改革だった

実践女子大学人間社会学部教授 山根純佳

労働基準法を守れない介護保険は違法な制度だ

介護福祉士・ホームヘルパー国賠訴訟原告

はたらく女性の全国センター会員 伊藤みどり

サービス縮小が続く介護保険を大胆に見直す
法政大学大学院公共政策研究科兼任講師 鏡 諭

書評

『あなたはどこで死にたいですか? 認知症でも自分らしく
生きられる社会へ』 小島美里著 (岩波書店 2022 年)

『絶望の超高齢社会—介護業界の生き地獄』

中村淳彦著 2017 年

連載

フォルケリな日常 北欧の暮らしのなかの政治第 10 回

問題の根源はデジタル化ではなく政治

(ジャーナリスト 写真家) 鏡 麻樹

韓国の社会的経済と政治 第 5 回

未来志向に欠けた保守政権下の協同組合基本計画

城南市協同組合協議会政策委員長

市民セクター政策機構客員研究員 崔 珉竟

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

井貝順子会員からの書籍紹介



世界は五反田から始まった (ゲンロン叢書) 著者:星野 博美

出版社: 株式会社ゲンロン 発売日: 2022/7/20 価格: 1,980 円 (消費税込)

井貝順子会員からの紹介

いつかここが焼け野原になったら、何が何でも戻ってきて、杭を打とう——30 年前に手渡された、祖父が残した手記。便箋に綴られていたのは、家族の来歴と、地元五反田を襲った「もうひとつの東京大空襲」の記録だった。戦時下を必死で生きた祖父の目を通して、タワーマンションの光景が町工場の記憶と重なり合う。大宅壮一ノンフィクション賞作家が描いた、東京の片隅から見た等身大の戦争と戦後。

著者の星野博美さんは東京の戸越銀座に暮らしている。実家では祖父の代から小さな町工場を営んでおり、年老いた父親が廃業するまで続けていた。本書はその彼女が街への〈異様な執着〉を原動力に、五反田界限 (かいわい) から見た近現代史を描いた一冊だ。

幸運にも、徴兵をのがれた祖父、だから我が家は戦争にはお咎めしない・・・と、だが町工場で作られたたいしたものではないものが、『軍国日本の軍需産業の最末端にぶらさがっていた』ことに、気づかされる。満州へ向かった開拓団は、「大地の子」山崎豊子著のイメージが強く、農村地帯の田畑の無い次男三男だと思いこんでいたので、この、五反田からの開拓団の存在は、本当に驚きました。国家総動員法のもとの中小商工業はまさに壊滅の憂き目にあった。戸越銀座へ行くのは生活必需品を買うためだが、武蔵小山へ行くのは「レジャー」という感覚、その差が、開拓団につながった。そして 1000 名を越えた荏原郷開拓団の中、日本に引き揚げるのができたのは、僅か 5%、中国に取り残されて生き延びたことが後に判明した人 (そのほとんどが子ども) を含めても一割にみえない。『現地住民にとって開拓団が侵略者だった・・・開拓団が入植した土地は、地元の人たちの犠牲の上に成り立っていた。団員は国策に騙され、開拓団を「人間の盾」としか思わない関東軍や、功名心や愛国心に煽られた浅はかな幹部の被害者かもしれない。が、現地住民にとってはまぎれもなく加害者だった 241 頁』そして、3 月 10 日の東京大空襲 (10 万人以上の死者を出した) のにくらべて、単位面積当たり 2 倍の焼夷弾を投下されたにもかかわらず品川区と荏原区を合わせた死者は 252 名だった。3 月 10 日にくらべ、5 月 24 日の犠牲者が少なく済んだ理由は、消火を諦めて逃げるといふ、本能として当たり前のことをして助かったということが多かったということだった。不要不急・同調圧力・マスク警察・・・コロナ禍のさまざまな現象が、この、五反田の戦中の暮らしの中に重なります。いまこのくらしが、世界につながっていることが実感できる本です。「歴史は繰り返す」というが同じ顔ではやってこない、すでに何か始まっているかも、だから自分は来る日に備えて過去を参照するのだと。

研究センター10月の予定

- 2日 (月) 研究フォーラム環境世話人会
- 3日 (火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」③
- 5日 (木) 金城学院大学人間科学部「協同組合論」③
- 7日 (土) ~8日 (日) 第5回協同の未来塾 (コープこうべ協同学苑)
- 9日 (月) 第5回常任理事会
- 10日 (火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」④
- 12日 (木) 金城学院大学人間科学部「協同組合論」④
- 14日 (土) 第5回地域共生フォーラム
- 16日 (月) 愛知の協同組合間協同連絡会 (幹事会)
- 17日 (火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」⑤
- 19日 (木) 組合員理事ゼミナールオンライン世話人会
- 21日 (土) 第4回共同購入事業マスターコース
- 24日 (火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」⑥
- 26日 (木) 金城学院大学人間科学部「協同組合論」⑤
- 27日 (金) 第7回組合員理事ゼミナール
- 28日 (土) 金城学院大学人間科学部「協同組合論」フィールドワーク
三河地域懇談会「生協総研研究集会」パブリックビューイング
- 31日 (火) 名城大学人間学部「ボランティア入門」⑥

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター Facebook 下記 QR コードでご覧ください。 Facebook QR コード	地域と協同の研究センター ホームページ 下記 QR コードでご覧ください。 ホームページ QR コード
	